風羅念仏　東武　三

へ 5
1897
3 止

野さらしの巻

歌仙行

野さらしを心に風のしむ身かな　芭蕉翁

尾花かうへをはしる稲妻　暁臺

入月や鳥乃声しらぬ霄のまて　宗瑞

詩も百篇とみちかゝよかり　不門

うしろから見せる羽織に手を通　竟平

樹ゝおかしらにおける朝霜　雷鳥

蘿齋文庫

へ 5

それなりに代る筆焚捨て　東園
今還幸の下手く也　兌十
ならぬ入て雅面白のじや君　瑞雨
苦勞る歯っちお目に懸りぬ　一長
浪らく越るわらりの店そなき　仙鼡
根生斑も子紫竟中　信之
三人ハ志りな不月る友　宗二
おくり火焼て悔る古返　宗扶
紛至盗る垣に隣る透通り　楚竹
風近ハ世話梅乃日向ふ里　三狂
かしましる瓢を捨て花の春　梅年
都の使者乃登に汲鮎　李門
吶らしときれえ吶の形ども皆　大瑞
降て涌らぬせし天夜軍　宗周
猶も桃も安達ヶ原の髑の骨　兌九
古丈も花車も是こ無差別　呉雪

情なき雨にふ沙乃砂利の上　呂仙

鶴に令の札つけし世哉　鵜柵

仙人に成てえらいと赤心　鄭坡

讒者に口乃とても角ても　荀志

変漏るたりし閨に板庇　久兵

供奉の数なる鷹も一居（モト）　瑞

待まなる茶子の月の十七夜　流光

着せて袷きも志つけ〳〵なり　雪

秀た秋て三井寺の鐘ひゞき来る　十

帆かのほふ舟に明〳〵　兎四

涼めは人目志のふの笠乃内　也

おもいれ点寿よく課せり　門

百とせに昔を志のふ花も今　雪戈

さかりゆく蕾の栗に笑艸　執筆

右

白兎園連

やの菜はなし

蒟蒻にけふは賣かつ若菜哉　芭蕉翁

泥乃乾くぬ道あゐ春　曉臺

附かへる駄荷に縣の威をふりて　梅人

猿にふつしみ小冠着なりけり　梅弟

人ことに銭筈に債交て宵の月　祇霍

貼る數寄川こつ只川の鐘　左拱

伏勢の味方に弱き兎菊　右拱

嘘こゝへ表口に婿入り袖　長民

客殿の襖籠によこたふ胡日新　還珠

小盃に雛子の華乃珍し　梅調

索掛の駒も瓢箪出しころ　角子

串柿ぬきみ銭又六貫　錦江

標蒲市に廿三秋も晴かなる　蒼谷

棹子の海浩にきらふ秋風　鳥道

早稲に香のふき飯くふ宵頃さ　百枳

籏竿祠に弓ハ備へ　松人

初恋も十日の雨に咲そろひ　鳥林

るさうほとりの二人女房　梅鳥

手車をふつて孫子の純吉彦　竹英

亭主出湯に名乃喜作　五嶺

盃のかハれた酒の名もなき　梅秀

都見え遠へる痛乃ちゝしき　鄙人

墨染の衣着加て古傍輩　甚九

誰佛ちやく和なきさ流　巴洲

綾取も卯木み重ね路たなれ　帰集

まふ宮蝶乃佛すらり　梅堂

ふつ寺のこれハ太こ講から　宗雅

ふ髪まし里の店子おのゝく　和月

粉掃て月みぞれひ餅莚　梅丸

里も先生嫁もむしつく　梅三

藪入ハ緋の縞乃と足久好け　梅月

屏風かくし新生姿浄留離　其林

暮うけて雨の志とく〳〵や　朶長

村いひ合ハ堅み種まき　梅賀

苔むす風羅念佛の踊踊　既酔

元禄志ふ蛙しら気ハ一　湖月

右

第一閣達

大那の雲み喜

を花の雲鐘ハ上野か浅草か　芭蕉翁

しつともなく湯を残遊　暁臺

波七日ゆふのたゆたひ花東風侘て　笠蘭

関ならしろきを明わたし也　基

志免ある牛の追分の霄月夜　菓

鴫ゑ鰊(ニシン)干萩の枯然　臺

木に控てみな裘乃茉墟　棠

狩乃翁矢をいくつ夕紅　蚕

世にさ夜乃かけろゑもせぬ庵出とれ　棠

ちるを芙蓉に茶乃湯気　蚕

あふ恋もわらハの脊男になち堅り　棠

筑紫ハ猛き雛覚てきけ　蚕

春暮もすらし定まらぬ二日月　棠

盆をみかけて他佛を買ふ　蚕

初旅に宿も露霧に迷ね　棠

織なき蚕に巣ならん　蚕

麦秋乃秋を日にツいて子規　棠

国々撞村に花さかりまで　蚕

西河以後一山ハ守護入て逃し　冬

駕ひきおろし傀儡泪せば　棠

ときにあまり黄金投たる雪まくれ　蚕

春方行舟を梶し門並　棠

ふ水を轍に筋をなかれり　蚕

寒恐より あいれ這出る　棠

さえくと山繊に傳ふ手を含る　蚕

髑髏にもゆる戦乃あと　棠

水札に巣に蒼鳴る雨の月　蚕

了苗かりいの穀秋紙の癖　棠

五尺に裁ありちる浩を田　蚕

空断のなみぬ下官人　棠

山門八七つ志まりて松乃風　蚕

雲ゆるらせき蝶乃うら　棠

盈ちと月のりへ定る方もなし　蚕

膳ひくれた嫂哉こむ　仝

これなるん汁も態も茶乃色　棠

日を十二日月を三月　執筆

右

浪花庵露興行

はるさめ表六

日の道や葵かたふくさ月雨　芭蕉翁

地下まで落る蜂の巣放　曉臺

あそふ児を機織側へ呼付けて　素丸

まるかゝくの重荷ひとり　徳布

なやらんくふ三日月の初冠　我泉

寄笑しくおちてうるさし　曇二

吹ぬ戸に蝶もたいれ掃除口　里丸
後住にさゝも今に啼て居る　宜明
なくさみも賭碁の内ハ人々も　逸雅
嘘も志れ表狭い城下　竹光
髪切に来へ嫁しぬちりひ言　石漱
錦毎に角をたれるまで　素濤
むしろ戸をも洩後家の月明り　逸窓
芋堀鍬にあら海をとりしまる　桂洲

世の中もさしてまて秋のゆうしき　野叟
隠居しさのも飯扇せんさえ　不二賀
もおしつり花となりての思ありし　栢翁
節句の髪すき会ハぬ連牛　馬水
鳴は日をかけて紺屋の来取扇　子光
きのえね農取ハいつも之絵　橋賀
仰来てハ参さん奴の橋杖　蘭共
子急つむ時に歌り目あつく　芳翠

本少し文ハ毎日志ほる雨に御　菊廬

薩埵をのかれ諾為もすらく　馬喬

下官ホ日おそらう詞ハ序韻く　雲知

目かまわ忘れて用日まうく　呉笠

年忌く浮死時み序ハ古佐牌　此桃

油断をみせぬ嵐兎出ん　麥丸

香月もいつしう重子ふめて　茂楓

こゑ淋しく通ふ宋舟　茂竹

餐塩も漸一椀に諂ぐ岑　来二

噺も多く歯を忘れ　千路

さらくと通れの連歌も啼鳥　立砂

音すみよしみ浜のきう浪　都静

ちれ花みもあらさらふ柃笠　野逸

さらひくて羅つ隣　蝶　風茱

右

天地菴連

四時之吟

白兎園連

虫干や出より長き刀番　宗周

はつしくれおとろし傘をかろしかり　大瑞

罷はく秋稲子蓮の實の礫かな　東園

蝶峠やうこく杣たく雲えうて　一長

咲ぬ方の枝ハのひうり梅の花　兎十

也ふんと稲の冀ふし船のうち　竟平

つるぬ乍船白きれなりかとまれ　瑞雨

あら迷より淋しさくらに檜笠　免九
よしきりに添れ声つけ気直の風　呉雪
松か枝やかくてハ鶯も隻来ぬうち　ていく
菊さのか咲て居るの氣苔農茶　荀志
石塔乃伯あらしかんこ多　久兵
漣乃舟にりかつ胡蝶々の風　(荒川)信之
一むれハ男ひてりや田うゑ時　(上喜木)呂仙
乃等て十日の菊に紅葉の風　(版吉)三狂
色のへぬ松の手柳や後の月　宗扶

此秋ハ利かくや鵜飼の那　仙鼠
さしきりや巣に遊かぬ峠不　免四
陰植なけともやゝり牡丹の風　梅年
瓢かゝ月や出るん鉢気か文　不门
牛の尾よ風そよくなりむの原　宗二
不二見れた世東のさくら咲たしも　李内
のりそりと月乃見て居難所かな　雪才

ゆくまちりて秋を病るさゝらかに　白兎園 宗瑞

○　第一園中

秋乃くれ志えし暖簾にもられかり　二代 宗瑞

まゝ柳や幕引あくれわらし舟　百枳

雲かゝもみちうも出て折らうれ　祇鶴

絵を蜘蛛にまかせて芭蕉かな　竹英

たおれ家のんちちなり秋の雪　梅賀

うはりなのよしみを折りて柳かな　烏林

物とさく柳の葉にあつさかれ　五嶺

蝙蝠乃出合かしらをおかな　梅調

月乃出まで八掛して咲るかな　角子

山吹やおさえよもみ底上　松人

涼しさや暦の通り菱を門　既酔

えさ花忘やこゝもこそ小田の庵　蒼谷

ぬりそての畔み蓋する田んしら　梅烏

たゆ紅や咲て寒林のたし月秋　宗雅

梅の散八綾の刹さ乙きうかな　湖月

雲の峰夕日一筋咲にけり　梅丸

大せ茂るやまも秋風乃小艇舟　梅人

第一圓

○

春の桜乃池たゝよふ光ゝの風　笠蘭

照や茸あハせんの花浄堂

夕暮乃かいはくろひぬ秋の雨

若鳥と山もうかちを見えけれ

梅咲や去年の名残の中なから　女 藍砂

それてすそ表ハ春しま保出らるなれ

伝ふ八本ところ定し居の月

ところし麦手まえて小春小

りまやおとろされぬる揺活の丈

竈馬乃ふと啼秋出りひて雨　宗宇

○

天地菴連

身あるひの約合もなし角落　有日菴 我泉

神代より血筋をうけて接木かな　佳日庵 徳布

秋風や孫たりのぬけし池駒の髪　東ミ斎 茂楓

桜あらて是までちらんかんこどり

貝売の花を紛らせれ汐干かな　萄藤庵 曇二

しら須の声やことりの山おろし　椎鼓庵 蘭庭

鷺起を志つけくて青田かれ

谷出とハ川かく消りゆく蛙鳴

凪くして鴫の声遠く川辺かな

山の井の水半日やかんこどり　桑乙亭 逸窓

こがらしの吹ふハ煩ふしもの煙　女 素簾

蝶くや夜月を流る鮭の雨

雲に添ふて曇らぬ心やかと見ん

風に笹もひまふる星のおちかな

白菊や露ほしけなる花の色

消うけて後に枝や山さくら　石漱

名残に風の旅路の落葉かれ　桂州

菜の花尓只みすかしぬ火縄哉　不二賀

郭公緒子まくらぬ鳥なかりし　素濤

緞子の袖の間をすハ（居）るや春の夕　都静

灰をおて些葉をたくに厳かな　呉笠

松の花ちるや風みも絡ふるひ　橋賀

入相の音遠しして精み哉　天坡菴 素丸

秋きや起て篇のさえこ源

○

薹乃藤かきりハあやし茎蜂　武秩父 何龍

手彩の氏子面なふ清みかな

家ちらひのさまうひ来たりこる跳絵

宵月やふとえてきるな馬乃らく

いかの音ららつふを見ほた蛙らふ　同 金生

すゞ風や気くいあけてりお家

小骨と曝りろや鵜乃氷

はつかしくれこゝ雲かまし上蔦かな

関路まへを幸山にして霧の中
案橋にあふなくもたて保とまれ
蝶も今ゞ光とをあ高崎や菊乃花
案舟も嬉ね尤寒し川手の宿
松山 文叢園 相今

きしまれ新らし獺まつり十三夜
松山 二川

嬉しく川浄音の落や桃乃色
大文 赤子

たゝみに茶かくれ花の葉かげ
暮つゝ浮て出る鴨や霧の雨
長作 山螢

初雁や地へ来るまもと思いけん、
對茂

世の秋に染るよりかは一葉かな、
記春

月き鉢や寒に老て仏ぬ暁雲
青山 光村

山里を春に音しぬ梅乃色
竹本 山童

登れる仏に来る子供にり更衣
嘆良い桜に花咲かせみの答む木槿かな
志く海や棟乃村乃夕まぐれ

朝霧のいきはく梅乃木添ふ哉　小川 燕芝

万歳や袖打ふり市の中、　臥皐

日毎かはれは又見えて飛雲庵、　其釣

麦秋や木食堂に雲の花　増尾 帰昌

春ゆく雨の音ひさく香かな　金杉 亀峰

出かゝる雲ひとつなし滝の月　花明

夕くれは気はれる数寄かな

雨中世渡の湧來る哉

栗をしる盤に浮く紅葉かれ

あきいて百舌鳥鳴寺る様のす　吉見 志山

市ある雨の舟も見ん日和かな　白雄

梅遠し浦を出て藤ヶ里　彫門

松とりて朔日頃ある万川の月　暁堂

書林

江戸室町三丁目
須原屋市兵衛
京寺町松原上
辻井吉右衛門